カトリック高松教区報

2006年1月1日（第109号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659
FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp

新年明けましておめでとうございます

肩肘はらない宣教

高松教区長　溝部　脩

「どうも教会は堅苦しくて仕方ない」と、晩年の父親はよくこぼしていました。私の父と母は日本基督教団の牧師館の二階で、晩年を送っていました。長男は牧師、次男は神父ということで、よりによってどうしてこんな所で晩年を過ごさないといけないのかと、父はぼやくことしきりでした。「ぼくの聖書はこれだよ」と言いつつ、週刊誌を見せびらかしたものでした。その父も、病床にあって「洗礼がほしいか」と聞くと、「洗礼を授けてくれ」と願いました。今になって思えば余り力まないで、彼の生き方をみつめていたのが良かったと痛感します。何事も大上段に構えて、相手を打ち負かすという姿勢は、良い結果を一つも生み出しません。

高松教区の目標は司牧ではなく、「宣教」だということを、一二月の司祭集会で話しました。五二〇〇人の信徒数の小さな教区で、その信徒の司牧ということに全力を投球することが、果たして大きな意味があるのかということの問いかけからでした。もっと四国に住んでいる人々に向かって、人々と共に何ができるかを考えることの方が大事ではないでしょうか。

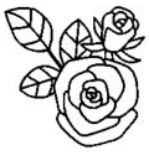
善意の人はどこの社会にもたくさんいます。実際たくさんの善を外的にも行っています。先日大分から「みんなの家」というパンフレットが送られてきました。ぬくもりを感じたい人や、障害を抱えて悩む家庭の人の憩いの家を提供している人がいることを知りました。昨年私の教え子で、施設を出た人が「自立支援の家」を開設しました。私はその家の後援者になっています。神様はこのような人たちを通して、社会に大きく働きかけています。あたりを見回すと、どれほど多くの人が私たちの周りでより良き社会のために働いていることでしょう。「宣教」とは、これら善意の人々と社会にどのように寄与できるかを考えることです。考えてみるとともやさしいことです。

教会の中でも、そこにいる信者さんの一人ひとりが、自分のタラントを活かす何かをみつければよいのではないでしょうか。一人で力む必要はないし、他人に押し付けることも要らないし、できることをできる時にしていけばよいと考えると、自然にゆとりがでてきて、その活動はとても豊かな人間関係を生みます。教会委員会も、信者さんがしていることを支えていく委員会になれば、その役割は大きなものになります。要は、こと「宣教」に関しては余り力まないことで

桜町教会黙想会にて

はばたき

溝部司教さまは「私ひとりで司教教書は作らない」と言われた。それは「広く信徒の意見を聞く」ということである。司牧評議会を立ち上がらせる為に昨年末で発展的解消となった信徒使徒職協議会は三六年の間で、信徒－小教区信徒会－地区信徒協－教区信徒協のパイプを確固たるものにしてきた。その意味では、もうすでに最初から司牧評議会は「広く信徒の意見を聞く」体制が備わっていることになる。後は私たち一人ひとりが、小教区で真剣に話し合うことではないだろうか。それが、教書の一部となり、教区の一致につながる道になると考える。年頭にあたり、新年と司牧評議会の発足を祝って…



す。力でもって押し込んでいく時には、必ず衝突し、分裂します。豊かな人間関係を生み出さないものは「宣教」になりません。私の父の例にもあるように、受洗までには随分時間もかかるでしょうし、また忍耐も必要でしょう。しかし、それは別にさしたることではありません。むしろ、何よりも必要なのは、人間の力ではなく、神様がしてくださるという信仰です。

教区信徒協最後の総会

昨年の一一月二六・二七日、徳島教会で信徒使徒職協議会最後の総会が開かれました。司教様はじめ、役員達、使徒職団体の代表二五名が集い、信徒協から司牧評議会へ向けての橋渡しをする会となりました。初日は司教様、浜口神父様から司牧評議会についての説明があり、この会は司教様や司祭と一緒に信徒が教区のことを考え、方向性をつくり、聖霊の働きに沿って実行に移していく大切な会であること等々が話されました。その後、昨年度の報告事項がそれぞれに発表され、夕食には最後の総会ということで旧役員の方々もご招待してささやかな懇親会が持たれました。二日目はミサの後、司牧評議会についての協議が昼食をはさんで活発に行なわれ、最後に、シルバー神父様から、司教様と一致協力してやっていってもらいたいとの挨拶で締めくくられました。

協議中のひとこま

徳島教会　高田芙美

第三一回高松教区教会学校教師研修会報告

八月二七・二八日、高松市桜町の四国カトリック会館にて第三一回の研修会が行われました。初日はまず、濱口秀昭神父様の講演「子どもとの関係づくり」から始まりました。

子どもと同じ目線に立ち、押しつけや指導ではなく気持ちに沿って共に歩むことの大切さをお話しされました。その後、各教会の現状と今後の課題を意見交換し合いました。

二日目の黙想会では、濱口秀昭神父様のご指導のもとで、呼吸や体の感覚を意識しつつ、隣にいる人と体を支え合ったり、思いやりを与えたりする体験をしました。その後感謝の祭儀をもって終わりました。二日ともに約三〇人の参加でした。以下、話し合いの内容を報告します。

子どもの人数の多い教会は、土・日曜学校を開いているが、少人数の教会は近郊教会と共に集まっている。各県や各地域で運動会や遠足などの行事を行い、子どもたちの交流を深める提案。

体験を通しての黙想

〈行事〉六月の「教区子どものつどい」には四国四県の子どもたちが集まり「友だちができてとても楽しかった」との感想。未信者の方もクリスマス等の行事に参加され、受洗に繋がった。開かれた教会として知人に呼びかけてみる。

〈雰囲気づくり〉親は仕事し、子どもは塾や習い事など心身共に忙しい生活、悩み多き現代において教会は心のよりどころとなっているか？子どもたちが来たいと思い、大人は信頼できる魅力があるか？安心し存在を尊重される場となっているか？親が熱心であれば子どもは通う。

〈卒業生に対して〉中・高・大学生になる青年達の集まりの必要性。独自に黙想会を行っている。

〈リーダー不足〉担当者のみがかかえこみ、精神的・行動的に疲れたりいきづまりを感じたりする。周囲の人々への呼びかけ、理解と手助けを求める。転入者や年輩の方も関心を持つ方はぜひ参加を。

全体を通して「継続は力なり」と強く感じました。奉仕の場である教会学校は子どもたちが数年後に思い出したり受洗に繋がったりしています。祈り求めていきたいです。

番町教会　山田智代

二〇〇五年教区信徒研修会

二〇〇五年教区信徒研修会が、九月三日、四日の両日、カトリック中島町教会で行われた。

東京教区の森一弘司教様を迎え、テーマは「家庭と社会そして宗教」であった。高松教区全教会から参加者が集まり拝聴した。

二日間の司教様のお話から内容を要約してみよう。

「日本に生まれて幸せと思う方はどのくらいおられますか？」との問いかけ。日本の統計上の自殺者数約三四、〇〇〇人、そのうちの年齢区分、理由、そして周りの人々のその後の苦痛などをいくつかの、関わった実例も話されながら続けられた。そしてこの統計の数字は、あくまで医師による死亡診断書の記入が「自殺」とされる数字であり、自殺とはされなかった「死」や未遂者数、自殺願望者数をいれると膨大な数であろう。この数字は約二〇分に一人が自殺死している日本の現実をしめしているのです。数値も世界トップ、特に中高年者の自殺数が大きいパーセンテージを占めていることも世界的トッ

プ、こういう日本社会の今、幸せな社会と言えるのでしょうか。因みに三〇数年続くアイルランド紛争においての死者数は五〇〇〇人…と。現在の日本社会、こんな多くの自殺者、未遂者、願望者は地球の難民、人類の難民と呼べないでしょうか？

社会における人と人との関わりの単位である「家庭」での、人心のありようは温かい、優しさに満ちたものといえるだろうか？人というものが常に願望してやまないものは優しさであり、心根が枯渇している人間関係、社会関係に今何ができるのであろうか。決して特効薬や対症療法はなく、一日、一日、生きる限りの倦むことのない「希望」のもと、愛を持っていきることが望まれているのではないか。キリスト者としてこの希望のもとに生きることが最小で最大の神に託された、同時に神に希望を託す責務ではないだろうか。

社会で諸々の出来事の真っ只中で生きる一信者としての心のあり方を、問い直しつつ、意義深く二日間のお話を聞いた。こういう機会に恵まれたこと、この機会を作ってくださった多くのご苦労に感謝するものである。

江の口教会　岩本多恵子

「2005高松教区民のつどい」報告

昨年九月一九日松山市の聖カタリナ女子高等学校で、「２００５高松教区民のつどい」を開催いたしました。

二〇〇五年度の開催は愛媛地区で主管をとの依頼を受けて、地区協では実行委員会を立ち上げ、五回ほど打ち合わせ会合を重ねながら、「今、高松教区に求められているのは何か。従来の『教区の日』の装いを新たにしよう。出来るだけ多くの方が参加し、溝部司教様のお話を聞けるようにしよう。次の世代を担う青年達の積極的な参加をうながそう。」のコンセプトで運営方法や名称などを検討、また実行方法を決めて準備しました。

前日夕方は道後教会にて四〇名の青少年が集まり、一泊して「前夜祭」を催し、盛り上げてくれました。

当日は三二名の司祭やほとんどの小教区・修道会から五二〇人を超える方々にお集まりいただきました。

参加小教区・修道会紹介の後、幼児・小学生は教会学校教師会が預かって、別室にて託児・バザーの準備に専念し、本会場では「教区の一致をめざして」のテーマでの「司教講話」、講話・司教教書についての「司教と語ろう」、「ワールドユースデー参加報告」などに感銘を受けながらも和やかな雰囲気でプログラムが進みました。

ミサ・聖体賛美式は溝部司教様司式のもと三二名の司祭が祭壇に登り、各県代表の聖歌隊と参加者の合唱「ひとつになろう」で始まりましたが、荘厳な中、一致を感じ取りました。

青年のWYD参加報告

又、「四国の物産展」と銘打ったバザーは司教様をはじめ、皆様に出品していただきました。担当者が驚くほど多くの品々でしたが、額に汗しながらの子供達の努力と皆様のご協力で、短時間の開催でしたがたくさんの利益を得ることが出来ました。このお金は溝部司教様が作られる子供・青年育成のための基金へ献金させていただきました。

今回の「２００５高松教区民のつどい」は溝部司教様をはじめ高松全教区民、各修道会の皆様、そして聖カタリナ女子高等学校のおかげで開催することが出来ました。不行き届きやご不便をお掛けしたことをお詫びしながら、ご協力に心から感謝申し上げます。

なお、この催しのビデオが教区広報委員会から各小教区へＤＶＤで配布されております。

最後に、講話で話された司教様のお言葉を引用させていただき、報告とさせていただきます。

＊「今回五百人集まったから成功しているという見方ではなくて、五百人が一つ一つに精魂込めてこうして準備してきた、そこに意義があるということ。そして、今ここで五百人という数ではなくて、五百人一人一人が五百人なのだというとらえ方が基本ではないかと思う」

＊「ないない節はやめましょう」

愛媛地区信徒使徒職協議会長　今泉芳純

鹿児島教区に新司教誕生

教皇ベネディクト十六世は、ローマ時刻一二月三日正午（日本時間同日二〇時）、パウロ郡山健次郎神父（こおりやまけんじろう・現鹿児島教区司祭）を鹿児島司教に任命すると発表しました。

仙台教区に新司教誕生

教皇ベネディクト十六世は、ローマ時刻一二月一〇日正午（日本時間同日二〇時）、マルチノ平賀徹夫神父（ひらがてつお・現仙台教区教区司祭）を仙台司教に任命すると発表しました。

アキーレ神父訃報

カトリック新聞でも報道されているとおり、高松教区所属のアキーレ・ランザロ神父様がイタリアで帰天されたという訃報が届きました。高松教区の皆さんも神父様のためにお祈りください。

アキーレ神父様は、一九九〇年一二月三日来日して六年間高松レデンプトリス・マーテル神学院で学び、一九九六年六月九日司祭叙階後、二年間新居浜教会で働き、一九九八年長崎司教区に派遣され、助任司祭として宣教司牧に励まれる中、体調を崩し、生まれ故郷イタリア・ナポリに帰り療養に努めていましたが、二〇〇五年一一月一二日ナポリの病院で肝臓病のため帰天致しました。四五歳でした。アキーレ神父様の活動は、司祭職をきちんと守りながら、まわりの人に優しく接し、すべての人が彼にキリストの姿を見ることが出来たと思います。

各地区だより

教会バザー

毎年一一月には道後教会と隣の聖母幼稚園とでいっしょにバザーを行ないます。そのバザーに私が初めて参加したのは一四年前。当時は、バザー開始の一時間以上も前からお客さんが並び始め、幼稚園の運動場を一周する長蛇の列ができたり、バザー会場に入場制限が必要だったりするほどの盛況振りでした。しかし、年々信者さんの高齢化、園児の減少、幼稚園のお母さんに働く人が増えたことなどの要因が重なって、バザーの規模は小さくなってきました。毎年バザーをお手伝いしていると、「去年より、売る品がまた少なくなったね」ということが増えてきましたが、そんな中で昨年も信徒会の総力をあげてバザーに取り組みました。主日のミサの参加者が平均五〇人、高齢者の多い道後教会で、バザーのお手伝いの人がなんと四〇人もいたのです。いかに皆がバザーに協力的かお分かりいただけるでしょう。

さて、道後教会の名物は教区民の集いのバザーにも出品した手作りマドレーヌです。数年前のバザーではマドレーヌとシフォンケーキの利益が二〇万円近くあったこともありますが、今ではその四分の一といったところです。マドレーヌを作るときには一〇台の天火を並べるので、同時に六〇～七〇個のマドレーヌを焼くことができます。（写真１）

写真１

ほかに、数年前にはたこ焼き、焼きそばを作っていたこともありますが、今も続いているのは炭火で焼く焼き鳥です。焼き鳥を始めたのは六年前で、そのときに生ビールも始めました。発案者はのん兵衛の〇ちゃんですが、ここでは名前は伏せておきましょう。

写真２

それまで、バザーというと女性が中心になって動いていたのですが（写真２・値付けの風景）、焼き鳥と生ビールのコーナーができてからは男性もおおいに活躍するようになり（写真３）、中ジョッキを片手に、実に楽しそうにやっています。かく言う私も毎年、生ビールを飲んでは元気を出してバザーのお手伝いをしています。今年からは新たにドリップコーヒーも加わり、美味しかったと好評をいただきました。

写真３

お決まりの余剰品販売のほかに、仕入れて売るものは香川県のドミニコ会神の母マリア修道院のドミニカン・クッキーと山口カルメル会女子修道院の手作りスリッパがあります。儲けさせてもいただきますが、いくらかでも修道院のお役に立てば幸いだと思っています。

こうして、昨年のバザーでは教会で約二〇万円の利益が出ました。一部を海外援助のためにカリタスジャパンへ送り、残りは予備費や建設積立金として積み立てています。

年配の方も多いのであまり無理なことはせず、これからも楽しいバザーができたらよいなあと思います。

道後教会　竹葉純子

道後教会、毎年聖体行列行う

聖体をたたえる賛美歌「パンジェ・リングァ」が毎年五月の聖体の祝日に道後教会から響いてくる。この日、ミサの途中で聖体行列が聖堂をスタート、隣の聖母幼稚園の園庭を巡る。十字架奉持者を先頭に、ローソクを持った少年少女、香炉を持つ侍者に続いて聖体顕示台をささげ持つアルベルト神父が行く。その後を信徒たちが賛美歌を歌いながら行列していく。「パンジェ・リングァ・グロリオージ…（いざ舌も

て宣べ讃えんかな御光栄高き聖体）」。園庭の緑の中に聖歌がこだまし、行列は進んでいく。

聖体行列はアルベルト神父が主任司祭として着任後、聖体への信仰をかたちであらわす行事として始められた。

道後教会で毎年行われている聖体行列（左端はアルベルト神父＝昨年5月29日）

道後教会　丸尾　修

中村に新名所

四国の小さな中村教会に、二つのマリア像が出来ました。安光ジーンさんのお兄様が亡くなり、供養のために、フィリッピンから、「ファチマの聖母像」が送られてきました。目が青いガラスで出来ていて、周りをレースで飾り祭壇に置きましたら、聖堂が素晴らしくなり、もう一つ、玄関にあった「神の母なる聖マリア像」を、庭に台座を作りそこに移しましたところ、教会に落ち着きが出て来ました。この作業を全て、安光久・ジーン夫妻が、暑い夏の日に、一ヶ月かけてこつこつと仕上げてくださいました。今では、通りがかりの方達までが、足を止め傍らで拝んでくださっています。安光ご夫妻のご厚意で、ここ中村に新しい名所が出来ました。

ファチマの聖母像

安光さん夫妻とマリア像

中村教会　山中憲子

二〇〇五年夏の思い出

七月一七日（日）盛夏、四日市サレジオ志願院より小神学生二〇余名の少年たちの訪問をうけた。わたしたちの教会に思いを馳せてみましょう。主日のミサの中で少年たちの心からの祈りのことばには、ミサを捧げる謙虚な姿と祭壇の前に整列した輝く瞳とこの小さな教会に天使の声がひびき渡った。

その歌声はウィーン少年合唱団のハーモニーを感じさせた。ミサ後、少年たちは清流仁淀川の川辺に導かれていた。川面には水鳥や夏木立、流れる雲と空の色までも鏡のように写されてその景色は筆舌に尽くせないほどである。引率のお二人の神父さまが、慈しみの眼差しで見守る腕の中で自然と遊ぶ情景は一枚の絵のようであった。

神の慈しみの中で健やかに育ちますようにとの祈りのなかで。

中島町教会　岡副実佐子

長崎巡礼に参加して

主の平安。

今年こそ・・・。三年越しに行きたかった恒例の長崎巡礼に今回初参加させていただきました。今年のテーマは歩く長崎・・・。長崎市内が中心の巡礼ということで、修学旅行以来の長崎は、とても喜びに満ちた巡礼でした。

今年で五年目になる巡礼の旅。城戸脇観光（城戸先生と私の父、谷脇とのツアーコンダクターと運転手の通称名？だそうです。）の節目の巡礼で、金曜の夜出発。月曜の早朝帰宅というスケジュールで、夜一〇時にジュード神父様の御ミサの後、出発しました。八幡浜港から大分の臼杵港に上がり、大分道、長崎道を通り、途中今回の旅の案内役の高田さんを乗せて、平和公園に到着。それから、徒歩で、如己堂を観覧。そのあと、すぐそばで宿泊地である、カトリックセンターに到着して昼食。お昼からは二六聖人、本蓮寺と歩き、中町教会へと巡礼。その後、飽の浦（あくのうら）教会を車中にて観覧。神の島教会に向けてバスを走らせていたのですが、時間があり、通り道沿いに木鉢教会に急きょ立ち寄り巡礼。急な階段をあがり、みなさんふうふう言ってお御堂に向かっていきました。そして、神の島教会へ。ちょうど、結婚式をなさっていたので、教会の下の入り江の舳先のマリア像を観覧。ここには、お社やいろいろな神様がまつられてました。きっと航行の安全を願ってみなさんまつられてるんだなと考えたのですが・・・。本来の意味は分かりませんでした。

そして、神の島のお御堂へ、木鉢教会の倍はある階段の数。先ほどの結婚式の花嫁さんも降りてくるのに大変そうでしたが、お年寄りの方の信者さんにはきついなーと感じながら・・・。そしてごミサを受け、出てきてみると、教会のステンドガラスの中に十字架が彫られてました。日光の角度でしか見れないのです。その後カトリックセンターにもどり、夕食、懇親会、就寝。翌日、浦上天主堂の朝六時半のごミサにあずかりました。お御堂の中心に

ある、無原罪の聖母のステンドガラスを見つめながら、何故か涙が止まらなくなり、胸が熱くなりながらゴミサを受けました。そして本祭壇の隣に今年八月に落成した、原爆マリアの祭壇を観覧。六〇年ぶりに故郷の浦上に帰ってこられた、頭だけの被爆マリア像と戦争で亡くなられた浦上地区の信者さんのお名前がありました。

そして、朝食をとり、伊王島へ向かうため、長崎港へ。今回長崎蛇踊りと重なり、渋滞混雑にあう覚悟でしたが、それもなく、順調で、偶然港で蛇踊りと遭遇。観覧できました。

その時、今回の一番の驚きが起きました。私たちの司教、溝部司教様がおられたのです。青年の結婚式に大浦教会にゴミサの為に来られてたそうです。司教様とお別れし、船で伊王島の馬込教会へ。とんぼ返りで今度は今回最後の地、大浦教会へ。

再度、司教様とお会いし、午後四時に長崎を出発。帰路に向かいました。

途中、ジュード神父様の運転（大型免許とったそうです。すごい!!）があり、ビンゴ大会があり、予定より早く臼杵港に到着した為、一便早く乗船。午前五時半到着予定が四時半になりましたが、全員元気に教会のほうに帰ってきました。全行程一二〇〇kmの旅でした。

この巡礼の旅で、自分の教会の信者さんと仲良くなれました。あと、自分の中の信仰と向き合えたと思います。青年達と、遠くではなくても、自分の教区のなかの小教区の巡礼、また、未来の青年の子供たちにも、交流を交えて、携わっていけたらな、と考えてます。

最後になりましたが、今回ほとんど運転させていただき事故もなく、無事帰ってきたことを、神様に感謝して。

中島町教会　谷脇孝延

聖書勉強会

私達の江の口教会では、二〇〇五年九月から、諏訪神父様の指導で、信仰教育がスタートしました。木曜日は午前中、金曜日は夕方からと、集まりやすい時間帯で、参加者は信者・未洗者、或いは受洗後長い年月を経た方、又遠方からの方などで、十分に準備された内容は、受講者にとって理解しやすく、好評です。ミサに与ること、日常の中で聖書に向かう時間を持つことは貴重なものです。信者同士の対話も少ない中、この講座を通して弾む会話はお互いを磨き近づける、願ってもない有難いもので、受講者の目も輝いて見えます。例え短い時間でも、投じられたこの一石の波紋は大きく輪を広げていくでしょう。回収された受講者のアンケートには、「話は楽しく和やかでいい」「忘れていた多くのことが蘇ってきた」「難しいけれど続けていきたい」などと、意欲が伺えます。

勉強会の様子

江の口教会　岩本多恵子

雨の日のバザーを手伝って

「わーぬれるー。」

雨がザーザーふってきました。でも私は、たこやきをまだくるくるとひっくりかえしていました。おともだちも、「いらっしゃいませ。たこやきおいしいよ。」と言っていました。だから、お店は大はんじょうでした。だから、私もひょう面がかたくなるまで一生けん命がんばりました。

「くるくる。」とひっくりかえしていると、いいやきぐ合いでした。でもお客さんが帰っていきます。

最後になると、たこやきがあまってしまいました。最後のしゅだんだときめて、半がくになりました。

子どもたち集合

「やった。」

たこやきはもうなくなりました。

私は、このバザーを手伝って本当によかったです。らい年もできたらいいなぁ思います。

徳島教会　小川　藍（六年生）

バザーのこと

「いらっしゃいませ、ありがとうございました。」それを何回かいいつづけてくたびれたから、言うのをやめました。ぼくたちはフランクフルトをやっていました。しょうばいはんじょうしていたのでうれしいです。

つぎのバザーでも、しょうばいはんじょうを目ざして見たいです。

でも、つぎのバザーも、しょうばいはんじょうするんじゃないかな？と思います。

徳島教会　小川佳祐（四年生）

鳴門は潮流と遍路の地

大塚国際美術館が鳴門公園の山続きで、すぐ西のひと山をそっくり使って座っています。

ここを訪れる多くの人は公園と美術館とを一日で巡るようです。限られた時間でしょうが上手に潮の流れに合わせて、よく組まれると良いでしょう。

鳴門のはやい潮流のように、あっと云う間に数時間を流されてしまわないように。

この美術館には古代から現代に至るまでの西洋美術の変遷が、美術史的に、理解できるように展示されています。格別なものとして、ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂と同じホールがあって、入って正面に迎えてくれています。其処には、みごとな天井画と壁画とが、陶画となっています。また、一一月三日、日本宗教連盟理事長、白柳枢機卿と大阪管区の池長大司教が来られ、故ヨハネ・パウロ二世教皇の肖像陶板を除幕され、展示に加えられました。ゆっくりと味わうようスケジュールを組まれるとよいかと思います。あとでも前でも結構ですから鳴門教会へも足をお運び下さい。

この地、鳴門駅のある撫養町は、四国八十八カ所の巡礼の入り口です。淡路島から船便で来て、西に向かって行く遍路さんを迎える町でした。諸々のわけがあって巡礼をなさる人々を迎える各札所（お寺）の「お接待」には人生を共に生き歩む実感があります。人生の労苦や感謝を共にしてくだる主イエスが、私たちの町をいろいろの形でお通りになるのではないでしょうか。ご自分の旅路で受けられたお接待をお忘れにならないのです。鳴門に来られたら、どうぞお立ち寄りください。

鳴門教会正面

鳴門教会主任司祭　乾　盛夫

国際交流ミサ

一〇月一六日桜町教会では国際交流ミサが行われた。

これは二〇〇〇年の大聖年を記念して、友愛セール（チャリティバザー）が開かれる日に、普段は別々に集まっている日本語・英語・スペイン語のグループが一緒にミサを捧げようということで始まった年に一回の行事。

昨年は教区一〇〇周年の記念行事準備などのため中止となったが、今年は溝部司教様にミサ司式をお願いし、聖歌・聖書朗読・共同祈願に各国語を取り入れて皆でミサにあずかった。

司教様は、タガログ語・イタリア語・スペイン語・英語を（もちろん日本語も）使われ、閉祭にあたり、「外国の皆さん、皆さんは単なるお客さんではありません。教会の大切な一員であることを理解してください。同様に日本人は外国籍の方々を、教会の大切な一員として受け入れる努力を惜しまないでください。」と呼びかけられた。

5ヶ国語による共同祈願

桜町教会　長谷川聖

香川地区信徒研修会報告

一二月四日、教区事務局長の浜口末雄神父様を講師に迎え「信徒の召命と使命」をテーマとした研修会が開催され、香川地区の信徒約六〇名が坂出教会に集いました。

「あなたたちもわたしのぶどう園に行きなさい」（マタイ二〇章）このぶどう園の労働者のたとえ話を基に、私たちには生まれてから死ぬまで、全ての年代において使命があり、神様からの呼びかけがあるということ。私たちの一生のうちには一分一秒も無駄な時は無く、その時その時の出来事は神様からの問いかけで、それを活かし生きていく意味を自分で作っていく。この言葉が深く心に残りました。

「やすらぎの贈り物」の著者ジョセフ・バーナーディン枢機卿は、自ら膵臓癌におかされながらも、世界中の人々、特に死に逝く人へのメッセージとして亡くなる一三日前まで手記を書かれていたそうです。病気の苦しみや孤独の中、共にいるイエスを実感し神の国の為に尽くされました。

そのような使命は私たちにもあり、出来るということを浜口神父様は話されました。

「あなたは一日中何もしないでどうしてここに立っているのですか。私のぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってあげましょう」講話の中で何度も繰り返されました。

信者の働きの場所は世界（ぶどう園）で、自らの使命を貫くにはキリストに（ぶどうの木に）繋がっていないといけない。共同宣教司牧に向けて、私たちはどのように務め、協力していかなければいけないのか、これからの課題も残りましたが、神からの呼びかけに素直に耳を傾け、自分に出来ることはすんで行わなければならないと、改めて感じることが出来た研修会でした。

坂出教会聖堂にて

坂出教会　冨田倫子

教区報リニューアルのお知らせ

１　発行回数を年間６回にします。奇数月の第一日曜日付けの発行とする予定です。

２　皆様からの自由な意見・要望等の投稿を掲載するコーナーを設けることにしました。原稿の締め切り日は発行日の一ヶ月前とします。

投稿上の決まり

①　原稿の字数は３００字以内（写真があれば写真もお送りください）

②　原稿には必ず「所属教会名、住所、氏名」をお書きください。匿名記事は、編集委員会で検討し、受理しないことがあります。

③　内容等：一般の投稿とは別にし、自由な意見を投稿して下さい。ただし、中傷・誹謗などと思われるものは、編集委員会で検討し掲載しないことがあります。

④　原稿の取り扱い：原稿は原則お返し致しません。

⑤　原稿の送り先：文書はできるだけメールで送って下さい。写真もデジカメで撮影したものであればメールで送って下さい。

（ア）メール　tk-koho@mxi.netwave.or.jp

（イ）郵　便　〒760-0074　高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当　宛　（TEL 087-831-6659）

（ウ）ＦＡＸ　087-833-1484

高松教区キリスト教講座開講

・日　時　１月21日～４月８日の毎土曜日
14時～16時

・場　所　四国カトリック会館

・講　師　司教様ほか５人の神父様

・受講料　全11回の受講料が5000円

詳細は各教会にお送りしたポスターをご覧下さい。

高松教区ホームページ開設

広報委員会では高松教区のホームページを１２月１日に開設しました。できたてのほやほやで外観・内容とも不十分なものですが，これから少しずつ「教区行事など教区事務局からのお知らせ」「小教区の紹介」など掲載し充実したものにしていきます。乞うご期待。

http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

司教日程

１月４日～５日（水～木）
サレジオ会中堅司祭集会

１月８日（日）伊予三島教会

１月12日（木）常任司教委員会

１月16日（月）番町教会聖書研究会

１月17日（火）大阪管区司教集会

１月21日～22日（土～日）
ＷＹＤフォローアップ（東京）

１月24日～28日（火～土）
殉教者列福申請願い（ローマ）

１月30日～２月１日（月～水）
東京神学院集中講義

２月２日（木）常任司教委員会

２月４日（土）教区を考える委員会

２月６日（月）番町教会聖書研究会

２月10日～11日（土～日）
イエズス会集会臨席（山口）

２月12日～17日（日～金）司教総会

２月20日（月）オブレート会アジア地区集会臨席

２月24日～25日（金～土）
日韓大学生交流会（広島）

２月26日（日）山口正平協大会（徳山）

編集後記

寒気つのるこのごろです。高松教区広報委員会が結成されて一年になります。編集、校正、発注、発送など手順も少しずつ慣れて参りました。本号は正月号として、写真はカラーにしました。今年度は、各県コーナーと各地区だよりを一つにまとめ、毎回各県から投稿していただくようになります。そして、司教様のご意向を伝えると共に、信徒の意見をも司教様に反映させるため、信者の皆様の意見を投稿していただく欄を設けます。心温まる話題大歓迎です。いろいろな意見を聞かせてください。この様な方針で進めて参ります。また、今年からコラムは桜町教会の田井貞良様が担当します。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

（住吉才子）